
それから

あめふらし 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それから

【Nコード】

N8670M

【作者名】

あめふらし3号

【あらすじ】

彼には生まれた時から前世の記憶というものがあつた。しかしながらそれ以外は至って普通な彼は、至って普通に成長していった。それでも彼の頭の片隅には常に、前世で自分に起こったことがまた自分の身に起こるのではないかという妙な予感めいたものがあつた。

——これはそんな彼の、異世界における“金の瞳”なる存在との再会に至るまでの物語。本編完結済。

——これまで誰にも言ったことはなかったけれど、俺には生まれ変わった時から前世の記憶があった。

しかしながら前世の自分は至って普通のオンナノコであったため、他人よりも特別何かに優れているということもなく。ただ、幼い頃は周囲よりも少し大人びていたことは確かだ。それは当然と言えば、当然のことだろう。所謂「見た目は子供、頭脳は大人」というヤツに限りなく近い状況であるわけなのだから。

……残念ながら俺はそこまで大した頭脳をしていなかったが。

前世の記憶を持つこと以外は至って普通の俺は、至って普通に成長していった。ただ、頭のどこかにはいつも、前世と同じことがまた自分の身に起こるのではないかという、妙な予感にも似た何かがあった。もしかしたら、俺自身がそれを願っていたのかもしれない。

気が置けない友人達と、毎日他愛もない話をして、ゲームをして。たまにケンカになっても、そこは男らしく拳で語り合って万事解決。前世で女であった時は、何で男はあんなにあっさりと仲直りするんだろうかと疑問に思ったものだが、男になったらなったで、今度はどうして女はいつまでも引き摺るのが分からなくなった。

悪くない。

多少刺激が足りないかもしれないが、俺にとっては全く悪くない日

々。

それなのに。

それなのにどうしてか、ふと思い出してしまふのだ。

——あの、“金色の瞳”を。

小学を卒業して、中学を卒業して。
それから高校を卒業して。

俺はとうとう大学生になった。

この頃には、もうこれはないってことなのかもしれないな、とほとんど諦めていた。ピーターパンも、もうこの年齢になった俺をネバーランドへ連れて行ってはくれまい。

俺はこの世界で生きていくんだ。

自分の中でやっと、そう覚悟を決めた、その矢先に俺の身にちょっとした異変が起こり始めた。

——それは本当に突然だった。

突然すぎて、つい先程まで自分が何をしていたのか、最早思い出せないくらいに。

——俺に何かを訴えかけるかのように、毎晩毎晩、頭の中で再生される前世の記憶という名の夢。

所謂「オヤスミ三秒」を自負する俺は、本当に、滅多に夢を見ない。眠ってから朝目覚めるまで、ほとんどノンレム睡眠だ。ちよつとやそつとの物音くらいじゃ、全く起きない。

そんな俺が毎晩毎晩、夢を見る。

——いや、もしかしてこれは“見させられている”、のか？

ある日、ふとそう思いつくや否や、俺は行動を開始した。

まず自分の死期を悟ったかの如く、ちよつとした身辺整理をし始めた。身辺整理とは言っても、その内容は全く大したことではない。とにかく、いつどこで突然自分が消えても問題のないように、例え

ば友人から借りていたゲームソフトを返すとか、これから先についての約束をなるべくしないようにするとか。

…… 本当は大したことではないことばかりだが。

次に俺は自分の服装スタイルをちよつと変えた。これはちよつといえども俺にとっては、結構な大したことである。とにかく、いっどこで突然飛ばされても問題のないように、旅人っぽい服装を心がけるようにした。これはさすがに友人等の幾人から指摘を受けた。なかには「お前、これからどつか旅にでも出るのか？」と、鋭いツッコミを入れる奴までいた。

さすがだ、武^{たけし}。

お前の目はいつも正しい。

これまで何回かロシアンルーレットなるものを共に体験してきたが、武は一度としてハズレを引いたことがなく、最近ゲットしたという彼女の菜々子ちゃんも本当にとっても良い子である。

そのせいで最近、前のように馬鹿をすることが減り、妙にクールぶってるので、そろそろ菜々子ちゃんの前で膝かくんの一つでも見舞ってやろうと思っていたが、お前のその目に免じてやめておいてやろうじゃないか。

そんなことを考え、ウンウンと一人で納得しながら奴の左肩を右手でポンポンと叩いてやったら、奴は何とも表現しがたい顔をして俺を見た。

——もし、俺の予感が当たったとしたら。

もうコイツには会えなくなるのか。

コイツだけじゃない。

俺が生まれてから今日までに会った人たち、その全員とオサラバだ。

それにもつと言え、オサラバするのは何も、人に限ったことじゃない。今ここにいて、俺という存在を形作ってくれた全てのものとオサラバすることになる。

本当に、俺という存在だけになる。

……いやしかし、その瞬間身につけているものくらいはオサラバせずに済んでくれないと非常に困るな。

そんなことを考えていた、ということは覚えている。

だが、それ以外にそれまで自分が一体何をしていたのか、もう思い出せない。

——そして、俺は再び“彼の地”に飛ばされた。

——再び“彼の地”に落とされて早数日、とでも言ったところか。

こんなことを二度も仕出かしてくれた誰かさんもそれをきちんと分かっていいのか、今回は容赦なく、俺を全くの無人の集落に落とした。しかしながらこの無人の集落はつい最近まで人が住んでいたのか、そこまで荒廃しているようには見えない。だが、食糧や武器といった使えそうなものはもちろん何一つ残されていなかった。

仕方なく丸腰のまま、飴とチョコレートと水と財布が入ったリュックサックを背負って、俺は旅を始めることにした。

——おそらく、この世界のどこかにいるであろう“金の瞳”を探す旅に。

あの無人の集落を出て、俺はすぐに苦難を味わうことになった。

旅人としてまだよちよち歩きし始めたばかりの俺を待ち構えていたのは、見渡す限りの広大な砂漠だった。

—— 昼間は焼けつくばかりに暑く、夜間は凍える程に冷え込む。

これにはさすがに、「死ぬのかな、俺」と本気で思った。昼間も辛いが、やはりなんといつても夜間の寒さが身に堪えた。ほとんど凍傷に近い状態になりながら、寝床にするテントも何も持っていない俺はその日、夜通し歩き続けた。たった一人きりの、先の見えない旅ほど心細いものはない、と痛感した夜だった。

孤独と死の予感に満ちた夜を、奇跡的に超えることの出来た俺に、再び奇跡は訪れた。
力無く、ほとんど足踏み状態で歩く俺の背後から、隊商らしき集団がやって来たのだ。

彼らは今にも死にそうな様子の俺を見つけるとすぐに、駆け寄ってきてその場で手早く介抱してくれた。彼らは宗教か何かで、困っている人を助けるように、との教えが染みついているのだろうか、と思わず考えてしまうほど誰も彼もが親切であった。

そんな彼らにそこから一番近いオアシスの町まで連れて行ってもらい、先を急ぐ彼らとその町の入り口で別れた。別れ際に何かお礼をしようとしたのだが、逆に貴重な食糧を貰ってしまった。最後まで笑顔で俺に向かって手を振りながら去って行く彼らの姿に、胸の奥がじんと熱くなる思いがした。

そんな心身ともに温かくなった体で踏み入れた先で見た景色に、俺は愕然とした。

無人、ではない。

決して多くはないが、確かに人が存在している。

町には一面に石畳が敷かれ、その両側に所狭しとばかりに背の高い、全体的に少し黄色がかったような色の石造の建物が立ち並ぶ。果物に、肉、魚など食べ物売る店があれば、衣服や食器の類、それから刃物を扱う店まで何でもある。

明らかに繁栄している様子が窺えるというのに、町の雰囲気は活気に満ち溢れているどころか、滅亡を前にしたかのように、どこかどんよりとしている。それに気のせいかもしれないが、若い人を見かけない。店の椅子に力無く座る人も、町の狭い通りを時折すれ違う人も、みなお年寄りばかりだ。

町の様子について少し疑問に思いつつ、一方でいい加減に丸腰状態を何とかしたいと思い、武器を扱う店で自分の肩幅くらいの長さの剣を買うことにしたのだが、財布を出そうとしたところでようやく自分がこちらの硬貨を持っていないことを思い出した。

今、財布を開けたら中身がすっかりこっちの硬貨に変わってるとかいうことは、……まあ、普通じゃないよな。

無駄だと知りつつも、店主の不審がる視線を浴びながら、変われ変われと念じて財布を開けると、なんと中身が見慣れない硬貨に変わ

っていた。

……いや、よくよく見てみるとこの硬貨には見覚えがあった。そろそろ何かを口にしそうな雰囲気醸し出す店主に、慌ててこれで良いと思われるだけ硬貨を手渡すと、どうやら合っていたようで、店主は俺に剣を差し出した。

そのことに少し得意になり、ついだとばかりに疑問に思っていたことについて、店主に尋ねた。すると店主は「ああ」と言った後、溜息をつき、その重い口を開いた。

「『闇の手』が出るってんで、人がすっかりなくなっちゃまってなあ。俺からしてみりゃ、どこに行っただって大して変わりやしないと思うんだが」

——『闇の手』、か。

そういえば昔、アイツは『闇の帝王』と呼ばれていたことがあった。まさかそれが伝言ゲームよろしく変化したんだろうか。ふと、目の前で暗い影を背負って話す店主の話を半ば聞き流しながら、そんな悠長なことを考える。

それにしても、もしも本当にアイツが『闇の手』の正体だとしたら、また派手にやらかしているようだ。あれから多少なりとも時間が経

ってしまっているだろうし、何かしら起こっていてもおかしくはないが、まさかここまで時の人になっているとは。

そこまで考えて、思わず失笑する。

——アレが『時の人』というのは、言葉だけなぞれば何と相性の悪いことか。

「成程。では、その『闇の手』とやらは此処からさほど遠くない場所で見撃されていると、そういうことだな？」

「ああ。たった数日の間にすっかり人気がなくなっちまうんだ。そうなんだろうさ」

「そうか。情報提供、感謝する。では」

「……おい！ お前、まさか『闇の手』のどこに行くんじゃねえだろうな？ 悪いことは言わねえ。やめておけ！」

首だけ回して、後ろを見やればそれまでの生気のない目はいつのまにか真剣な目へと変化していた。

——思わず見入ってしまいそうな、強い意志を宿した目。

「やらなきゃならないことが、あるんだ」

そう、あの目を見たいんだ。

自分にはない、あの輝きを放つ目を見たいんだよ。

町の奥へと向かって、ひたすら歩いて行つた。奥へ進めば進むほどすれ違う人は少なくなり、とうとう最後には誰とも会わなくなつた。先程話を聞いた店主がいた辺りの方がまだ活気があつたと思えてしまうほど、この辺りは今、俺が石畳の上を歩く足音以外、全く何の音も聞こえてこなかった。

その代わりに、止むことのない風が何やら仄かに生臭いような香りを運んできた。随分と久しい香りだが、俺にははつきりとそれが何であるのかが分かつた。

——この先にきつと、『闇の手』とやらはいる。

何の根拠もないというのに、俺は『闇の手』の正体がアイツだと確信していた。そして、アイツとの対面を前にして、自然と心臓の拍動が速くなつていった。先程手に入れたばかりの剣を握る手も、心なしか汗ばんでるように感じる。

アイツは、のこのこと現れた俺に怒るだろうか。そもそも今のこの姿を見ても、ちゃんと俺だと分かるんだろうか。

いや、きつと分かってくれるに違いない。

多分、きつとまだ契約は完全には切れていない。

多分、分かってくれる。

アイツなら。

そんなことを考えながら、ゆっくりと周囲を見渡しつつ、更に奥の方へと進んで行った。

突然聞こえた叫び声に、俺は走り出した。それに従い、一層強くなる血の匂いに思わず顔を顰めながら、それでも未だ聞こえる叫び声を頼りに走り続けた。

目に飛び込んだ光景に思わず足が止まった。

けれども俺の頭は冷静にその光景を注意深く眺め、地に転がっているそれらのほとんどが五体満足であることに安堵していた。どこかの国じゃ、バラバラ遺体が発見されることもそれほど珍しいことでもなくなってしまうている。辺りは血の匂いが充満していて、酷く気分が悪かったけれども、おかげで何とか冷静さを保つことが出来た。

だが、それでも俺は動揺していた。
自分が何故、ここまで走って来たのかをすっかり忘れてしまっていた。

不意に目の前の、少し遠くの道が開けた場所で、何者かが目の前で息も絶え絶えに剣を構える男に向かつて、大きく剣を振り上げるのが分かった。その者は頭の先から足の爪先に至るまで、すっぽりと真っ黒な布を被っていた。

誰にでも分かる。

この距離で、この瞬間から。

——間に合うわけがない。

きつと足を踏み出すか踏み出さないうちに、ことは終わってる。

それでも諦めきれない俺は、呼吸も整わず息を荒くしたまま、再び走り出した。

間に合う。

絶対に、間に合ってみせる。

「……………痛ってえ。やつは無理だったかあ……………」

奇跡的に、紙一重で剣を受けることに成功した。受けることに成功したといっても、実際はこちらの剣をあっさりと折られて直接体

で受けることになってしまったのだが。

……ついさっき買ったばかりだったんだけどな、この剣。

正直、痛みも確かに感じているが、それよりも止めどなく溢れる血に次第に意識が遠のくような気分がする。そんな状態のなかで、俺はきつく引き結んだ口元を無理やり引き上げながら、相手の様子を窺おうと、俯いていた顔を上げた。

——あ、マズイ。

一気に血の気が引いた。

いや、実際血は止まっていけないから、流れっぱなしではあるのだけれど。

常ならば何かしらの感情を向けてくる目が、そこにはなかった。無理やりにでも読み取ろうとしたならば、何かいきなり増えた、ぐらいに思っているんだろうか。

完全に思いあがっていた。

自分だけは別である、と。

アイツなら、きっと分かってくれるだなんて、全くもって俺の身勝手な考えに他ならなかった。

少なくとも前はそうであつたかもしれないが、今は違つのだ。それを全く分かっていなかった。微かに感じた、未だ繋がっているという感覚は俺の自惚れが成せる妄想であつたらしい。

ふと気づけば、つい先程まで『闇の手』と呼ばれる目の前の黒装束に殺されかけていた誰かが、いつの間にか消えていた。どうやら相手の関心が俺に向かったのをこれ幸いと、自分はまんまと逃げ出したらしい。しかしながら取り残された俺には当然、そのチャンスは無い。

俺は抵抗する間もなく、その場に仰向けに引き倒され、相手は馬乗りになって俺の上に押し掛かってくる。とてもじゃないが押し返せそうもない。

自分は、どうやらここで死ぬみたいだ。

……まあ、一人救えただけでも良しとするか。

俺の命を奪うことになるであろう剣は、既に振り上げられた。そんな状況にも関わらず、不思議なほど冷静にそう判断した。そして、せめて最後に、とばかりに俺は小さく呟いた。

——「ヨウ」と。

「いった……」

死の痛みを予感して思わず目をつむって待ち構えていたところ、なかなかその瞬間が訪れないどころか突然、何故か頭をはたかれた。

まさか、いたぶってから殺すことにしたのか。最悪だ。

そこで、俺は恐る恐る目を開けてみた。

「……近っ！ 近い近い近いっつの！」

——居た堪れない。

目を開けたら、恐ろしく近距離で、それは鼻と鼻が接触しそうなくらいな勢いで、見られていた。しかも怒りの感情を露わにして。

剣は俺の首筋にぴたりと当てられた状態で、少しでも動こうものならそれは間違いなく俺の胴と首とを切り離すだろう。それでも俺は、先程までと比べるとさほど動揺していなかった。

暫くそんな状況が続いた後、黒装束はやつとその口を開いた。

「……このクソ野郎、一応確認だ。俺の名前を言ってみろ」

——クソ野郎とは何だ、クソ野郎とは。

だが、先程までと明らかに様子が違っている。思わず、相手の暴言に言い返そうと思う余裕が出来るくらいには。そもそもまず、この暴言自体が良い証拠だ。この雰囲気は、自分が慣れ親しんだものに近い。

「さつさと言え、愚図。本気で殺すぞ」

全くもって相変わらず短気で、口が悪い。俺が色々と考えに耽って答えようとしないのに、早々に焦れたらしい。さすがに少し距離をとったものの、それでもなお近い距離を保ったまま。俺の上に跨る奴は剣を握る手はそのままに、空いてる手を体と体の隙間にねじ込んで未だに血が溢れる傷口を無遠慮に弄り始める。

……何だかよく分からないが、今度は別の意味で居た堪れなくなってきた。

くそつ、こっちだって暴言を吐きたい。

その嫌らしい手つきは何なんだ。これは新手の尋問か。

文句は山ほどあるが、やはり怖いものは怖い。

「ヨウエイ
耀映」

——「私にとってこの世界での光だから」

そんな恥ずかしいこと極まりない台詞を言った奴がいたっけか。いやいやあの頃はまだ出逢ったばかりで、何も知らなかったのだ。今ならちゃんと分かっている。少なくとも、コイツは光とは本質的に正反対の生物であることぐらいはしっかりと、嫌になるくらい実感済みである。

『闇の手』

なかなか良いではないか。闇、という単語が入っている時点で、俺などよりも余程本質というものをよくよく見抜いていらっしやる。

そこからは恐ろしい程の手際の良さであった。

突きつけていた剣を文字通りわきにのけると、血で濡れた指を舐めた。それはそれは、見ているものが身動きできなくなるほど、嫌らしく、ねっとり。

片手を後頭部に、もう一方を背中に回して非常に荒っぽい動作で俺を抱き起こし、動揺する俺の口を塞いだ。いや塞ぐどころか、むし

る速攻し、侵略してきた。

——そうこれはまさしく、“侵略”以外のなにものでもない。

今日の教訓。

たかがキス、されどキス。

キスを甘く見る者は、まさしくキスに啼かされることになるのだ。
君、忘れること勿れ。

「お前存在感無さすぎにも程があるだろ、ボケ」

「へーへー、悪う御座いました。……つか、そっちこそいい加減にしろよ。さすがに怒るぞ」

「ああ？ 何、寝言ほざいてんだてめえ。この恩知らずが。俺がちやんとお前を認識できるように印つけてやってるんだろっか」

すっかり人間の姿に見慣れてしまったため忘れていたが、コイツは本来“獣”であつたのだつた。本来の姿であつたならば、今頃俺の体はコイツの齒形だらけなことであろっ。

……いや、その前にそもそも生きてるんだろっか。

「……もう十分すぎるだろ」

先程からずっと、飽きることもなく俺の体の至るところに噛みついてくるのを、俺に対する怒りをぶつけている、という解釈をし、今の今までじつと耐えてきたのだが。

一体、いつまで続けるつもりなのだろうか。

後で自分の体を見るのが恐ろしくなってきた。

文句を零し始めた俺に、言葉通り人の姿をした獣はふと顔を上げると、ここのたまった。

「下半身がまだだろうが。四の五の言ってねえで黙って転がってろ」

今なら全人類の誰よりも一番に、電柱に同情することができる気がする。まったくもって行為者とは身勝手すぎるものだ。こちらの了承を得ようとせよ、一方的に自分の縄張りであると主張し始めるのだ。

ああ、電柱よ。

君は不特定多数にこんな仕打ちを受けているのか。
なんと哀れな身の上であろうか。

最近の内容が見え見えすぎる映画よりもずっと、泣ける話じゃない

か。

大した抵抗も出来ず、がつつりと全身にマーキングされてしまった。

——何だ、この仕打ち。

時代の悪に立ち向かう勇者とは、詰まる所、悪に捧ぐべく周囲に担ぎあげられた哀れな生贄と同義だと思う。運が良ければ生きて帰ってこれる、みたいなそんなノリ。

暫く一人、部屋の隅の方でずぶずぶと沈んでいた気持ちなんて、知ったこっちゃないようだ。全身満遍なくマーキングし終えたのを確認するや否や、新たな爆弾をぱいっと放ってくる。

「お前、名前変わったろ。言え」

「え」

「言えつつつてんだろ、カス。……言わねえと、お前の精液吸い取るぞ?」

最後の方は耳を舐められながら、囁かれました。
現在、水音が響いている状況です。

正直、何とか言わないで済ませられないか必死で考えていた。ここ

まで流されるがままにやられてきてしまったが、自分の名前はそれこそ最後の砦である。クソで愚図でカスな俺でもさすがに自分の置かれている状況は理解しているつもりだ。

―― 契約を更新しますが、どうしますか。

普通の状況で尋ねられたなら、俺は即座に契約破棄を申し出る。というか、コイツとの契約は本当に続いていたのか。妄想、ではなかったのか。

あの時は妄想であることに打ちひしがれる思いがしたが、今ならむしろ狂喜乱舞するだろう。

「ちょ、何処触ってんだよ。いい加減にやめーろー!」
「うるせえ。名前言う気ないんだったら、黙ってる」

―― これは非常にヤバイ。

指先が接触しただけで、反応してしまった。

ちなみに現在の俺はマーキングの際に服をはぎ取られたまま、下着一枚という何とも情けなさすぎる状態である。

「待て待て待て待てっ！　いつからお前は男もOKになったんだ？
違うだろ。言っとくけど男だからな？　正真正銘お前の目の前に
いる奴は男だぞ！」

「お前頭腐ったのか？　もう一度だけ言うぞ。名前を、言え。言わ
ねえなら、精液吸い取って、種がなくなるまで吸い取って、それか
ら根元縛って出せないようにしてやりまくって、十分溜まったらま
た根こそぎ吸い取ってやる」

血迷うな、現実を見やがれ、とばかりに説得にかかるが、まるで見
事に手応えらしきものが全く感じられない。それどころか、もしか
しなくとも、状況は悪化の一途をたどっている気がする。

「ちょいつ！　……………何かっ、増えてるう、みたい、なんですけど
っ……………」

「何だその馬鹿丸出しの喋り方は。……………つか、名前言う気ねえん
だな？　真っ裸で手足鎖で繋がれて、一生監禁されてえってことだ
な？」

「……………ざけんなっ。んな訳ねえ、だろおがっ！」
「じゃ、監禁ってことで……………口、塞ぐぞ？」

「……………アカネ明音」

もう観念するしかない。

さすがに調教プレイは御免蒙る。

早業で抜き取った人の下着を、口の中に押し込めようとする手が止まった。残念ながらも一方の熱心な手は、己に課せられた仕事をやめる気はないようだが。取りあえず、自分の言葉を守る気はあるようだ。良かった。

が、まだ気を抜くのは若干早かったようだ。

「足りねえ」

「は？」

「お前の名前、それで全部じゃねえだろ」

もしかしくとも、名字のことを言っているのか。
だが前は名前だけで事足りたはずだ。

——
“真名”って名字込、だったっけか。

「いちいちトロクせえんだよ、てめえは。さっさと食えよ」

貴方が手に持って口に押し込もうとしているのは、食べ物じゃないです。

それは衣服で、しかもさっきまで身につけてた下着という類のものです。

反論したいことは山ほどあるが、やはり嫌なものは嫌だ。

「三浦明音！」

ぺろりと、だめ押しでもう一舐めすると、やっと満足したようで拘束された身も解放された。

ここまでくると、いつそ開き直りの境地である。
……というより怒りたくても、身の倦怠感に引きずられたのかそんな気力も出て来ない。

「お前にも利点があったとは」

この鬼畜野郎、もう嫌だ。
情けなかるうが何だろうが、この世界の出口があるなら今すぐ懇願してでも、そこを通りたい。

「最高に美味かった」

目の前で挑発的に舌なめずりをする獣、もとい少年が一人。

この図、本当にどうなんだろう。

今更ながら、何でこんなに流されてしまっているのだろうか。

——相手の外見年齢は中学生並みであるというのに。

唇の動きが分かるほど耳に口元を寄せて、体に染み入るようにそつと、囁く。

「また飲ませてくれよ？ 主」

今回もまた、コイツと主従関係を結ぶ所から始まることになるようだ。

一応主人はこちらな訳で、有利な立場に立っているはずなのだが。

ともあれ、どうやらまずは“贖罪の旅”をしなければならなさそうだ。

あのことろ 前編

――さすがにそろそろヤバいかもしれない。

多少慣れたとはいえ、やはり流れ落ちる程に血を流すというのはなかなか肉体的に堪えるものだ。

「……もういいですか？　さすがにこれ以上血を流すと意識が飛びそうなんですけど」

ある時、ふと振り返った途端に飛びかかれ、尻もちをついてしまった私に、獣は覆いかぶさるようにして、私の肩口に食らいいついてきた。そうして未だに食らいついたままの獣に、私はその頭に手を伸ばし、宥めるように撫でた。こうすると、比較的素直に言うことを聞いてくれるというのを最近学んだ。

――全く一体これは何なんだ。

最早諦めの境地にも似た思いでひたすら撫で続けていると、不意に遠くの方で何か物音が聞こえたような気がした。嫌な予感がしたため、「いい加減、放してもらえませんかね」などと言いつつ、少し強めに獣の頭を押しつけようとするが、こういう時に限って言うことを聞かず、それどころか不機嫌そうに唸り始めた。

——緑という色が一切存在しない、砂漠になる一步手前の非常に乾燥した土地。

少し前までは、ごく限られた時期にだけ降っていた雨が、今は本当に、全く降らなくなってしまったらしい。元々、雨の降る量が少ないこの周辺地域に住む人々にとって、雨とはすなわち“神からの恩恵”を意味する。そしてその“神からの恩恵”を全く受けられなくなったこの土地を、人々は「ガルラ・ビ・イラムフ」、この地域の言葉で“神に見捨てられしもの”と呼んでいる。

そんな土地に最早、誰一人として住む者はいない。

もし万が一、この土地を訪れる者がいるとすれば、それはよっぽどの変わり者か、あるいは私のように何も知らずに、気づいたらここまで辿り着いてしまった哀れな旅人ぐらいであろう。

ちなみに、以上の情報は全て、つい先程、目の前で唸っている獣から聞いて初めて知ったものである。正直、もっと早くに知りたかったとは思うものの、そもそも私が上手く情報収集することが出来ていないのが悪いのである。

「旅をする者にとって、迅速かつ正確な情報こそが己の身を守る命綱になる」、とはいつかどこかで聞いた話である。全くもってその通りであると、旅を続けていくうちに何度も思い知らされた。お金は確かに全く持っていなければそれはそれで大変かもしれないが、それでもやっていけないことはない。けれども情報を全く持ってい

なければ、とてもじゃないが旅を続けることはほとんど不可能といえるだろう。

とにかくにも、全部、今更である。ここまで来てしまったからには、もうこの道をまっすぐ突き進んで行くしかない。ここを通らない別のルートも勿論考えてはみたが、かなりの距離を引き返さなければならなくなる上に、例のあの厄介な国にもう一度足を踏み入れなければならなくなる。ようやっとの思いで出てきたというのに、そこに自らもう一度足を踏み入れるなんてことは、まさに飛んで火に入る夏の虫。

……それにしても、本当に、いい加減に勘弁してほしい。
こんなところから、一刻も早く、抜け出したいというのに。

先程から全く変化しない状況に思わず溜息をつく、遠くの方から今度は一つの声が聞こえてきた。

「大丈夫か？ 今助けてやるからな！」

「違うんです！ これは別に襲われてるわけじゃなくて……」

「意地を張ってる場合か！ どこをどう見ても獣に襲われてるじゃねえか。いいから大人しくしてろ！」

—— 獣に襲われている見ず知らずの小娘一人を助けようとするなんて、なんて素晴らしい人なんだ。

普通なら拍手喝采を浴びるに相応しい行為。

だが今は違う。

先程も言ったように、私は獣に“襲われている”わけではない。

最初は遠くから聞こえた小さな声が、次第に大きくなる。声の聞こえる方を見たところ、一人の男性がこちらに向かって走って来るのが分かり、私は慌てて言葉を返すが、男性の足は止まらない。

一方で、多少の状況変化には全く動じないこの獣は、相変わらず私の肩口に食らいついたまま。声の主はもうすぐそこまでやって来ているというのに、見向きもしない。押しのけようと獣の額に乗せた手はそのままに、私はまたやってしまったかと思わず溜息をついた。

あのことろ 後編

『目障りだ。消えろ』

「そいつは聞けねえな。何でこんなところにお前みたいなのがいるのか知らねえけど、放っておけねえ」

男性は随分と遠くから走って来たのか、やや息を乱しつつも、獣が直接彼の脳に響かせたであろう低音かつ鋭い脅しに全く怯む様子はない。それどころか、即座に言い返すや否や、私に覆いかぶさる獣の背に向けてまっすぐに剣を構えた。

少し長めの波打つ赤い髪を一つに束ね、丈の長い茶色の外套をはためかせながら、剣を構えるその姿は、荒々しい言葉とは裏腹に泰然としている。その態度に加えて、身につけている衣服、武器から察するに、彼は間違いなく老練の旅人だ。

色々話を聞いてみたい、などと考えながら男性に視線を向けたところでやっと、私は現状というものを思い出した。自分の考えに囚われて周囲が見えなくなってしまうのは、私の悪い癖だ。いつ何が起こってもおかしくない、緊迫した空気の中、この状況を打開すべく思い切って口を開いた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ 違うんです。これは襲われているわけじゃなくて、何というか、その……一種の挨拶みたいなもの

で！」

「挨拶って……そりやないだろ、いくらなんでも。何でこんなのを庇うんだか知らんが、……悪いな。見過ごせねえよ、俺には」

取り敢えず男性に向けて制止の声をかけたは良いが、その後が上手く続けられず、到底相手を納得させられそうにない言葉が口から零れ、最後は笑って誤魔化すしかなくなった。そんな私を馬鹿にするわけでもなく、男性はあくまで冷静に言葉を返すと、私に向かって安心させるかのように束の間、微笑んだ。

——格好良すぎる。惚れるじゃないか。

思わずその微笑みに見惚れたのが悪かったのか、途端に獣の様子が変わった。それまでは然程興味なさげに、見向きもしないままであったのに、徐に食らいついていた私の肩口から顔を上げて対象を捉えるその目は、既に完全に戦闘態勢に入っていた。

——これはマズい。

男性も相当な腕前であろうが、対するこちらはこの獣である。いくらなんでも徒で済むはずがない。しかも他の場所ならばともかく、よりにもよって今いる場所は、「ガララ・ビ・イラムフ」。こんな誰一人としていない、何もない場所で怪我を負おうものなら、それがたとえ軽度のものであったとしても、これから先の彼の旅路に一体どんな支障を来してしまうか分からない。

今にも両者がぶつかり合いそうな状況の中、私は決心した。

無用の戦いは避けて然るべきだ。
妙なプライドなんてものはさっさと捨てよう。

そして私は、この世界で私だけが知る、その唯一の名を呼んだ。

「なあ、何でお前はしょっちゅう俺に噛みついてきたんだ？」

ふと昔を振り返ってみて、ずっと疑問に思っていたことを思い出した。当時、何度聞いても答えが返ってくることはなく、結局分からず仕舞いのままであった。

それにしても酷い話だ。一体どこに、自分の従わせる獣にしょっちゅう噛みつかれる主人がいるというのだ。戯れ合いの延長ならまだしも、軽く目眩が起るまでの血が流れ落ちる程に噛みつかれるというのは、まずないだろう。おかげでその現場に遭遇し、かつ助け出そうとしてくれた人達に、この情けない現実を一つ説明しなければならなかった。

当时を思い出し、恨めしげに見れば、対する当の、今は人の姿をした獣は心底馬鹿にするような目を俺に向けながら、あっさりと、まるでそれがこの世の理だと言わんばかりの口調で言い切った。

「はあ？ 求愛行動以外に何があるってんだよ。アホが」

「……………求、愛？」

いやいや求愛、ではないよな、違うよな。そんなわけないもんな。

“きゅうあい”って、他に何か意味があったっけか。俺が知らないだけで、この世界特有の、誰もが知っている何かで“きゅうあい”という名のものがあるのか。

相手が発した言葉を瞬時に頭で処理しきれず、混乱する俺に、獣は何を思ったのか徐にこちらに近づいてきた。そして更にぐつと顔を近づけると、混乱の極みにある俺に止めを刺すかの如く、決定的な言葉を発した。

「つまりヤラせるってことだな。お前がいつまでも乳臭えガキのまんまでいやがるから、参ったぜ。…………でもまあ、今度はその心配はねえな」

「……………は？」

目の前で嫌な笑みを浮かべるその姿を、未だ思考が追いつかないままぼんやりと見ていると、突然唇を舐め上げられた。驚きのあまり目を閉じることもできず、ただその瞳の金に見入る。

「今日は俺がたっぷり飲ませてやるよ？ 主」

——さて、一体どうやってこの危機を乗り越えようか。

「現代」 前編

目覚まし時計が鳴る音が聞こえて、俺はのろのろと手をベッドの脇に手を伸ばした。しかしながら、手を伸ばした先に目覚まし時計はなかったようで、仕方なく布団から出て目覚まし時計を止めようとした。

ところが、布団から出ることがどうしてか出来ない。何かがきつく俺の体に巻きついていて、身動きが取れないのだ。寝相のあまりの悪さに、自分で自分の体にタオルケットか何かを巻き付けてしまったのかと、まだ寝ぼけた状態の頭でぼんやりと考えながら、とにかく巻きついたものを引き剥がそうと手を掛けた。

その瞬間、その手をべしりと何かに叩かれた。

……結構痛かった。

これはさすがにおかしいと、だんだんと目覚め始めた頭で感じてはいるものの、しっかりと目を開けることが出来ず、なかなか視界がはつきりしない。よく分からないが、とにかく自分の思うように事が運ばないことに俺は少し苛立ち、先程とは違って今度は思い切り体を振ること、無理矢理その巻きついたものを振り落とそうとした。

ところが、次の瞬間にベッドから蹴り出されたのは、俺だった。

驚きのあまり、床に転がったまま動けずにいると、俺を蹴り出した奴は徐に起き上がり、そのまま容赦なく俺を踏みつけた。

「んなとこで寝てねえで、さっさとメシの用意しろ」

そして見下すような目を俺に向けながらそう言つと、さっさと風呂場に向かって歩いて行つた。

その姿、その態度を見て、奴が誰であるかは疑いようもなかったが、そうなるより一層訳が分からなくなった。様々な憶測が頭の中を駆け巡り、俺は混乱の極地にあつたが、ふと目に入つた時刻を見て、一先ず大急ぎで朝食の準備をし始めることにした。

……何だ、この悪夢。

マジで全然笑えないんですけど。

朝食を二人揃って食べた後、慌てて大学へ向かおうとする俺に何故か奴までついてきて、そのまま二人揃って大学へ。俺が必死にチヤリを漕いでいるのに対し、奴はその荷台に座って、乗り心地が悪い、速度が遅すぎる、などと始終文句を垂れていた。

大学に着いたら着いたで、奴は当たり前のように俺の横に座って、

同じ講義を受けた。……というか、講義の始まりとともに寝て、講義の終わりとともに起きた。それならそれで、せめてずっと寝ていてくれればいいものを、俺が席を立ち上がると同時にむくりと起き上がるのだ。

本当に何しに来たんだよ、お前。
もういいから帰れよ。

切実にそう思うものの、そんなことを直接本人に向かって言えるわけもなく。

昼休みになり、ラウンジの2階の奥にあるテーブルで今朝慌てて作ったおにぎりをひたすら無言で咀嚼していると、少し遠くの方から武がやって来るのが見えた。

「はよ」

そう言っただけの向かい側に座り、近くの購買で買ったであろう見るからに美味そうな弁当を開ける武の姿を見て、俺は挨拶を返しながらふと、あることに思い至った。

「……ってかお前、午前中どうしたんだよ？ いなかったよな？」

普段、俺はほとんどの講義を武と一緒に受けている。他の奴らはいくと、学生の本分たる勉強をおざなりにし、部活にバイトに、更にはマージャンなどの賭けごとにそれぞれが日々精を出しているの

で、全く期待できない。それに引き換え、武は大変頭がよろしいので、勉強において俺は武に何かと助けられることばかりなのだ。

俺の問いかけに、武は鶏の唐揚げを口に入れつつ、何かに納得したかのような表情をした。

「バイト先の飲み会でちょっと飲みすぎたから明日の午前中は休む、って昨日メール送ったろ？ ウラにしては珍しく返事返ってきてねえなって思ったら、やっぱり見てなかったのかよ」

「……マジで？」

武の言葉を聞き、俺は慌ててそのメールを携帯で確認しようとするものの、肝心の携帯が見つからない。そう言えば、今朝起きた時点から携帯を見た覚えがない。服のポケットにも入っていないし、鞆の中にも入っていない。

……どうも、家に置いてきたらしい。

「現代」 後編

「忘れてきたのか？」

「……何かそんな感じ」

武の問いかけに俺が脱力しながらそう答えると、武はいつの間に食べ終わっていたのか割り箸を袋に戻し、それをしっかりと閉じた弁当の蓋の上に置くと、仕上げに輪ゴムで元通りに括った。そして徐にズボンのポケットから携帯を取り出すと、手早く何か操作し始めた。メールでも届いたのだろうかと俺がその様子を見てみると、視線を感じたのか武はふと手を止めて顔を上げた。

「お前、探すの下手だからな。念のため鳴らしてやるよ」

「おお！ サンキュ」

武の言葉にその手があった、とばかりに俺が声を上げると、武は笑って再び手を動かし始めた。

武の「鳴らすぞ」という声を合図にじつと周囲に耳を澄ましていると、意外にもすぐ近くから、それもはっきりとした音量で俺の携帯の着メロが流れるのが聞こえた。そのことにひどく驚きつつ、発信源は一体どこなんだ、とその在りかを探っていたところ、ふと俺のすぐ隣で腕と足を共に組んだ状態で椅子に座り、先程からずっと眠り続ける奴の姿が目に入った。

まさかと思いながら、俺がそのズボンのポケットに向かって恐る恐る手を伸ばすと、そこに触れる前に素早くぱしりとその手を叩き落

とされた。何か同じようなことがつい最近あったなと思いつつ、そろそろ視線を上げて奴の顔を見ると、奴は薄目で俺を見下ろしていた。

奴は相変わらず鳴り続ける着メロの音に眉を顰め、徐にズボンの右ポケットからあるモノを取り出すと乱暴にそのボタンを押し、それと同時にびたりと着メロの音が止んだ。

「……ちょ、それ、俺の！俺のだから！何で俺の携帯をお前が持ってたんだよ！」

目の前で平然と俺の携帯を再び自分のポケットの中に戻す奴の姿に、あれはもしかして俺のじゃないのかと一瞬自信を失いかけるが、そもそも奴は携帯なんてものを持っていない。一方で、そんな俺の葛藤の上に紡がれた言葉を奴はひたすら鬱陶しそうな顔で受け流すと、「煩い。騒ぐな、アホ」と言って、何事もなかったかのようにしてそのまま再び目を閉じてしまった。

ふざけんな。話はまだ終わってねえ！とその肩を乱暴に揺さぶりつつ叫びたいところだが、奴の昼寝の邪魔をするともれなく恐ろしいことが待っているの、悔しいが今は大人しく引くしかない。

「何か、何となくこんなオチな気がしたんだよな。……ま、でも携帯が無事なだけ前よりマシだろ？」

深い溜息を吐き、顰め面で頬杖をつく俺を、武は少し困ったよう

な表情で微笑みながら、そう言って慰めた。確かに武の言うように、前回知らぬ間に携帯を水没させられたことを思えば、今回は携帯自体が無事なだけまだマシな方ではある。

「確かにそうだけどさー。……んったく、何考えてんだか」

俺の携帯に一体、何の恨みがあるというのか。ただ単に不定期に鳴る着信音が気に食わないんだろうか。だが、俺の携帯の着メロはそこまで派手な音ではないし、学校にいる間は基本的にマナーにしている。

「それじゃあ、まあ、そろそろ行くか？ 次、社学だから早めに行かねえと後ろの席がなくなっちまう」

武の言葉にふと近くの壁にかかっている時計を見ると、次の授業が開始する約15分前であった。他の授業であれば開始時刻ギリギリに行っても全く問題はないが、次の授業である社会学に関しては別である。授業初回当初、受講者数が講義室の定員オーバーであったにもかかわらず、どうせ後々減るだろうと担当教員が部屋を変更しなかったため、多少人数が減った現在もほぼ定員ぴったりで、本当にあっという間に席が埋まってしまふのだ。

「あ、悪い！ 時間全然気にしてなかった」

俺の言葉に反応したのか、すぐ横で奴が起きた気配を感じつつ、俺は慌てて荷物を手にして席を立った。

一瞬、自分がどこにいるのか全く分からなかった。目の前に見える木目の天井から首だけを動かして徐に周囲を見渡し、そこでやつとここが昨晚宿泊した宿屋の一室であつたことを思い出した。

「……すげ、懐かし」

ふと零れ落ちた滴に、両目を片腕で覆い隠しつつ、気づけば無意識のうちにそう呟いていた。

本当に随分とリアルで懐かしい夢を見たものだ。確か俺は大学にいて、武がいて。おまけにどっかの獣まで出てきてたっけか。

俺はつい先程まで見ていた夢について更に詳しく思い出そうとするものの、既にそれ以上は何も思い出すことが出来ず、それがどうしようもなく齒痒く、辛かった。

あちらの世界の事を決して忘れていたわけではないが、普段はいわば心の奥底に仕舞い込んである。それがこんな風に、夢などで不意に目の前に突き付けられると、途端にそれまで一緒に仕舞い込

んでいた、あちらの世界に対する懐かしさや恋しさといったものが一気に溢れ出して仕様がなない。

あちらは今、一体どんなことになっているのだろうか。俺がいた頃よりもずっと未来の時間を刻んでいるのだろうか。家族は元気にしているだろうか。武は、大学の奴らはどうしているのだろうか。

全て、いくら考えても仕方がないことだ。俺にはそれらを知る術が全くない。分かってはいるが、どうしたって考えてしまう。

とりあえず気分を入れ替えるために顔でも洗ってこようかと、俺は両目を覆っていた腕をはずし、ベッドから起き上がろうとした。ところが、ベッドから起き上がることがどうしてか出来ない。何かがきつく俺の体に巻きついていて、身動きが取れないのだ。

妙な既視感を覚えつつ、恐る恐る自分の体に巻きついたものに目をやると、それはしなやかな筋肉のついた人間の男の腕であった。

これを無理やり振り払おうとすれば、俺は痛い思いをすることになる。どういいうわけか、そうに違いないという確信があった。

——俺はこの後、一体どんな行動を取るのが正しいのだろうか。

日常 その1

目覚まし時計の音に目を覚まし、ベッドから立ち上がって徐に振り返ると、そこに昨夜寝るときには確かになかったものが存在していた。その存在に一瞬びっくりとするものの、それが見慣れたものであることにすぐさま気づき、俺はその頬に手を伸ばした。

「おい、コラ」

「んー」

「勝手に俺のベッドに入ってくんなといつも言ってるだろーが」
「……ん」

容赦なくその頬を引っ張っているというのに、それでも頑として目を開けようとしない。しかしながら俺の朝は忙しい。よってこいつに付き合っているような暇はない。仕方なくさっさとその頬から手を離し、俺は手早く朝の支度を整えると、鞆を肩に引っかけ玄関に向かった。

「出る時、ちゃんと鍵かけろよー！」

靴を履き終え、玄関の戸の取っ手を片手に声を掛けると、「んー」というくぐもったような声が聞こえた。ほぼ寝ながら返事をしていえると思われるが、このやり取りはこれまでに何度も行ってきたので恐らくはきちんと戸締りをしてくれることだろう。それにしても昨日は一体何時にやってきたのだろうか。

くろかわあきら

黒河彰。勉学に関しては全く期待できない奴らこと、俺の友人その1である。

マージャン、ポーカーから囲碁、将棋まであらゆるゲームでもって賭けごとをし、その恐ろしい程の勘と勝負強さで大金を稼いでいる。見るからに草食系な優男然とした外見に油断すると、あつという間に身ぐるみを剥がされるといふ噂が入学時から流れていた中、なんでそんな危険な男と友人になったかと言えば、偶然の一言に尽きる。偶然、入学式の席が隣になり、どういうわけか賭けごとが超強いんだという話で盛り上がって、気づけば俺はその日の朝に道端で拾った1000円玉を奴に投資していた。一体どうしてそんな流れになったのか、今思い出してみても全く訳が分からない。

後日、俺にあの1000円玉で稼いだという1000円札を持ってやってきた奴からそのお金を受け取り、代わりに9000円を返すとは何かもの凄く驚かれてしまった。「これはお前のだ」「いやお前のだってば」というやり取りを何回か繰り返した後、結局はその場にいた武共々三人でそのお金を持ってとあるファーストフード店に行き、フライドチキンを皆で美味しく頂いてきた。

この制度(?)をいたく気に入った奴こと彰に、俺はそれ以来、週一で1000円を投資している。そしてそのお金を元にして彰が稼いだお金で、時に武や他の奴らも交えながら食事に行ったり、遊びに行ったりしている。

今朝のようにいつの間にか俺のベッドに彰が侵入していることは、誠に不本意ながら日常茶飯事と化している。本格的に賭けごとをするのは深夜から明け方にかけてが基本だそうで、俺の自宅が大変交通の便が良い場所にあることを知るとすぐに俺に無断で合鍵をこしらえ、かなりの頻度で不法侵入を繰り返している。

不法侵入者なら不法侵入者らしく、その辺の床でクッションでも枕にして寝ると言っているのに、毎回俺のベッドにまで図々しくも侵入してくる。これで寝癖が悪かったら問答無用で叩き出すところなのだが、俺も俺で眠りが深くてちよつとやさつとじゃ起きない上に、彰もまたまるで死んだようにうんともすんとも言わず静かに、身動きすらせず眠るタイプなので、結果として日常茶飯事と化してしまっている。

「あつれ、珍し。お前、今日バイトは？」

授業開始15分前という、俺にしては珍しく余裕を持って大学にやって来ると、講義室の後方の方で一人、片手に握った何かをもぐもぐと食べている奴がいた。随分と不機嫌そうに栄養バーを齧っているなと思ったら、そいつは俺の友人であつた。

「コックの信長さんが熱出して休みでさー。朝ご飯食いっぱぐれ。もー、朝から超がっかり。気分ガタ落ち。今日は完璧、塩フランク

の気分だったのにさー」

彼は最近、営業時間が朝の4時から8時までという面白いパン屋でバイトをしていて、朝ご飯はその売れ残ったパンを分けて貰えるそうで、「これぞまさに天職ってやつかー！」と以前騒いでいた。塩フランクというのは俺も少し分けて貰って食べたことがあるが、これがなかなか美味しかった。真ん中に小さなフランクフルトが入った極々シンプルなパンなのだが、ドイツパンらしく噛みごたえがあり、がぶりと齧った時にこんがりと焼かれたフランクフルトの油がじわりとパンに染みて、それがまた良いのだ。

ちなみにコックの信長さんというのは、もちろんそのパンを作っている人であって、信長というのが名字で名前は康弘というそうだ。初めてその名前を聞いた時、世の中には俺の知らない珍しい名字を持つ人がまだたくさんいるのだろうなと漠然と思ったものだった。

「塩フランク、俺もまた食べたいからさ、まだバイトやめるなよ？」
「オツケーオツケー。今回ばかりは俺もそう簡単には辞めねえぞ。
てか、辞めると言われても辞めねえし。だってあそこのパン、めっちゃめっちゃウマすぎだっつーの」

そう言っただけで笑う彼の言葉に同意しながら、その隣の席に座ろうとしたところ、彼は突然すつくと立ち上がった。

「んじゃ、そろそろ俺行くわ」

「何、もう次のバイト入ってるのか？」

「貧乏暇なし、俺暇なし。バイトが俺を呼んでいる。つーわけで、じゃあなー！」

彼は口早にそう言っただけで、慌ただしく講義室を出て行った。大学には

単に朝食代わりの栄養バーを食べに來ただけのように思えるのだが、そんなことで本当に彼が無事に大學を卒業できるのか非常に心配である。

日常 その2

えなみとおる

榎並徹。勉強に関しては全く期待できない奴らこと、俺の友人その2である。

徹はまさにバイト人間。一にバイト、二にバイト、三・四もバイトで五もバイト、といった具合である。そんなにバイトをするからには何が何でもお金を稼がなければならない、深刻な事情とやらが存在するのかと思いきや、そうではないらしい。確かに学費以外は基本的に自分で何とかしなければならぬそうだが、それにしてもバイトの量が半端ない。“睡眠時間は3時間で十分だ”が彼のモットーである。睡眠時間や食事の時間、その他諸々を犠牲にしてまでバイトをするその理由は、実のところただ単にバイトが好きだからだろうと思われる。

徹との出会いのきっかけは言わずもがな、そのバイトである。大入学前の春にとあるイベント会場にて3日間、受付及び案内役をするという超短期バイトであったのだが、彼の働きぶりは言葉で言い表せない程もの凄いのだった。徹はたとえどんな相手であろうとも、どうすれば相手に気に入られるか、その術を知り尽くしている。気づけば運営側はほとんどそっちのけで、俺は3日間専ら彼の指示に従って動いていた。おかげで初めてのバイトの割には、そこそこまともに動いていたのではないかと思う。

徹の容姿はというと良くも悪くも平凡で、街中ですれ違ったくらいでは恐らく誰の記憶にも残らない。ところが彼の“素顔”はとい

うと、一転して誰かしらの記憶に残るような、思わず人目を引く容貌をしていて、普段はそれを敢えてメイクによって覆い隠している。あまり詳しくは聞いていないが、どうも過去にその容貌のせいで相当嫌な目に遭ってきたらしい。今の社会というのは良すぎても駄目、悪過ぎても駄目、とにかく普通が一番、という風潮が強く、何ともつまらない世の中になったものだと思う。

わざわざメイクを施して隠したがるほどであるから、自分の容貌に対してトラウマにも似た何かを抱いているのかと思いきや、ただ単にバイトをして回るのに平凡であつた方が楽なのだそうだ。その時、その場の状況に合わせて態度どころかその顔つきまでも変えてしまふのだから、彼の適応能力には本当に脱帽する。

昼食を食べにラウンジに向かつて歩いていると、隣で武がグラウンドに視線を向けながら「あそこに見覚えのある奴がいるぞ」と声を掛けてきたのでそちらに視線を向けると、確かに武の言う通り非常に見覚えのある奴が一人で延々とリフティングをしていた。

「あそこにいるの、多分そうじゃねえか？」

「おーおー。あれは間違いなくそれっぽいな。ちょっと声掛けてみるか」

俺がグラウンドの端に走り寄って試しに名前を呼んでみると、あいつは器用にリフティングをしながらこちらに視線を向けて俺たちの

姿を確認した後、サッカーボールを置いて俺の方にやって来た。

「よ！ 今はサッカーの助っ人やってんのか？ 相変わらずリフティングも上手いなー、お前」

「そうでもない。暫くやっていなかったらやっぱり若干感覚が鈍っていた」

近頃は一体何に取り組んでいたのやら。俺の記憶に新しいものと言えば、やはりこの間の長期休暇に現地まで行つてとことんやり抜いてきたというカポエイラだろうか。帰国後、見事に真っ黒に焼けた姿を見て、本気で一瞬誰だか分からなかった。しかしながら焼けるのも早ければ抜けるのも早いようで、こうして見ると相変わらず黒いことには黒いが、当時と比較すると既に大分色が抜けてきているような気がする。

「邪魔して悪かった。でもちゃんと適度に休憩して水分補給もしろよ？」

「ああ」

「今日はカチャトラ作る予定だから、ちゃんと食べよ？」

「ああ、分かった」

気のせいカチャトラという単語を言った時に、目が一瞬大きくなったような気がする。やはりこれはカチャトラが好き、ということの良いのだろうか。そんなことを考えつつ、あいつと別れ再びラウンジに向かって歩き始めると、「相変わらず世話してやってるんだな」と武が感心したような声で言った。

「何せあいつの親御さんから直々にお問い合わせされてるからな。それに誰かのために作ると思った方が、こっちもやる気が出るってもんだし」

俺の自宅とあいつの自宅が実は徒歩3分圏内であったことを知ってから、度々食事を提供していたところ、ある日あいつの自宅にてあいつのお母様と遭遇してしまった。シチューの入った小鍋を手に玄関で立ち尽くす俺を見てお母様は即座に状況を把握し、くると俺に背を向けると、「ちよつとアンター！ 何、人様に迷惑かけてるのよ！ それならそうとちゃんと報告しなさい！」と部屋の中にいるあいつに怒鳴り込んで行った。

そして暫くの口論の末に、俺に対してお母様から深々と謝罪された後、「ご迷惑じゃなかったら、またたまにこいつに食事を分けてやって下さいませんか？ 勿論、その分のお金はこいつからきっちり持つて行って頂いて構いませんので」とのお願いを受けてしまったのであった。

「でもまあ、あんまり世話を焼き過ぎるんじゃないぞ？ 餌やりだけで十分だ。掃除くらい自分でやらせろ」

「……ん。了解」

武も本当に鋭い奴だ。今まさにそろそろ掃除でもしてやるかな、と考えていたところであった。しかしながら、確かに甘やかしすぎるのは良くない。今日はカチャトラを届けたらさっさと帰って来ることにしよう。

日常 その3

なかしずかしゅういち

中静秀一。勉学に関しては全く期待できない奴らこと、俺の友人その3である。

秀一はスポーツへの情熱が半端でなく、とにかく一度何かに興味が沸くとそれを自分の中で納得のいく形に出来るまでとことんのめり込む。秀一に関しては本当に全てをなげうつても何かを成し遂げようとするので、かなり危険である。そもそも彼は見事なまでに生活能力ゼロで、家事も掃除もこちらが思わず笑ってしまうほどに全く出来ない。しかしながらそんな欠点が気にならなくなるほどに秀一の運動能力は凄まじく、実際に彼の極めたスポーツに関しての腕前というのはどれも余裕でプロ級である。

秀一と初めて出会ったのは、大学での体育の授業においてであった。中学で3年間みっちりテニスをやっていたことから、それなりの自信を持ってテニスを選択したというのに、初日から秀一という俺からすると化け物並みの強さを持つプレイヤーと当たったことで俺のその自信は即座に地の底にまで落ちた。あっという間に3ゲームをストレートで落としたところで俺は一旦タイムを取り、隣のコートにいた武を問答無用で緊急招集した。そして秀一に対して1対2での試合続行を申し入れ、武を俺の背後に配置した後、無理やり試合を再開させた。

武は最初こそ戸惑っていたが次第にその実力を発揮し、結果としては残りの3ゲーム中1ゲームしか取れなかったものの俺としては大満足で秀一に握手を求めたところ、「次は最初からこれで行こう」と言われて思わず固まってしまった。正直、もう二度とお前と戦う

ものかと思っていたにもかかわらず、結局その後もその授業は始終、武と一緒に秀一と戦うはめになってしまった。

秀一の体は同じ男として憧れを抱かざるを得ない。俺は残念ながら腹が6つに割れたことが未だに一度もない。秀一のように体脂肪率が7%みたいな体になりたいわけではないが、あの見事に6つに割れた腹を見る度にどうにも羨ましく思ってしまう。そんなことを思っていたせいか無意識に秀一の腹を凝視してしまっていたように、ある日秀一から「一カ月もあれば6つに割れるぞ?」と誘われた。少し惹かれるものがあつたが、そのトレーニング内容が恐ろしいことになっていそうだったので丁重に断っておいた。

「それにしてもまた来週から実験始まるんだよな。しかも次の実験担当する教授がすっげーレポート厳しいんだってさ」

今日の授業を終え、武と並んで校門に向かって歩く途中、視界に入った白衣姿の学生に俺は実験という言葉を出し、思わずそんな愚痴を零した。ほぼ毎週一回行われる実験及びそのレポートは、俺にとって本当に憂鬱そのものである。つい最近やっと前の実験のレポートを仕上げたばかりだというのに、すぐにまた新しい実験が始まるとは本当にげんなりだ。これでまた暫くの間、図書館に通いつめる日々が始まることになる。

「らしいな。おまけに提出期限に1秒でも遅れると受け取ってもらえねえんだってな」

「マジかよ……。しかもあれだろ。またいろんな薬品取って混ぜて、機械が何かでデータ取ってそれをグラフにして、みたいなやつなんだろう？」

「まあ、大体そんな感じだろ」

「うげー。俺、そういうの一番苦手なんだよな。それならまだスケッチしてる方がマシ」

これまでいくつかの実験を行ってきて分かったことだが、俺は本当に実験に向いていない。うっかり作業に手を出せば、もれなく失敗がついてくること請け合いだ。前の実験でも希釈シリーズを作っている時に誤って薬品を入れるべき試験管を間違え、結局そこだけ一からやり直しをすることになってしまった。実験は基本的に4〜5人からなる班で行われるもので、俺の失敗はすなわち班員全員の失敗となる。あれは本当にかなり自己嫌悪に陥った。

「でもまあ、やらなきゃ単位もらえねえし」

「それなんだよなあ。……本当に俺の実験の単位は武が取ってくれるようなもんだよ。武がいなかったらマジで無理だから」

出席番号で俺のすぐ前を武にしてくれたことについては、本当に自分の運の良さとやらに感謝したい。実験はそのほぼ全てが出席番号順に班が組まれる。普段の授業はともかくとして、実験に言ええば俺は完全に武におんぶにだっこ状態である。前の実験での失敗も結局は班員の誰からも非難を浴びることなく、同じ実験班にいた武によって速やかに修正が施され、事無きを得た。

「お前もしかして、まだこの間のやつ気にしてんのか？」

校門を出たすぐ先にある道路に突き当たり、俺たちの前を横切って行く車がいなくなるのを待っていると、武がそう言っただけで不意に真横から俺の顔を覗き込んできた。

「いや、別にそういうわけでも……あるっちゃあるんだけど」

「あのくらいどうってことねえだろ。実習なんだから失敗の一つや二つは当然想定内。……まあ、中には絶対に失敗しちゃいけないところもあるけどな」

「確かにその通りなんだけどさ、」
「ウラ。渡るぞ」

武の言葉に俺がまた何かを言おうとした時、武はそう言っただけでそれまでの会話を打ち切るようにして車の切れた道路を渡り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8670m/>

それから

2011年12月19日05時49分発行